いだてん
韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ㊹

劇団同士の感情論

唐辛子をぶちこんで一気に飲み、走り回ると酔いの回りが早いという剛の者もいた。坂になっている横丁の下の角に「きくや」という焼酎屋があった。「きくや」は改装されていまもある。昔の「きくや」はテーブルにコップを置くと、コップは流れた。木のテーブルが古くなって傾いていたのである。この店に、なぜか演劇人が集まった。

いまの演劇人は仲がいい。よく交流しているらしく、合同公演をやることもある。関西の演劇人が東京の演劇人と組んで、関西と東京で演劇をやっている。共通のテーマがあるのである。いい時代なのか、嫌な時代になったのか。

我々の時代は政治をテーマにする劇団、と政治にまったく無関心の二つの派に分かれていた。その2派が飲み屋で隣の席になるのである。どちらの派も「まずい」と感じるのだが、2派とも引くに引けないものがあった。そこはそれ意地である。「あいつらとは口をきくな」。それでも、飲み始めは2派別々の話題で飲んでいるが、やがては演劇論になる。

背中合わせになっていた一人が別の派とつい話をする。「どんな演劇をやっているのですか」。それが突破口になって口げんかになる。感情的な演劇論である。「だから、おまえらの演劇は駄目なんだよ」「どこが駄目なんだ」「駄目だから駄目なんだ」。演劇論にもなんにもなってはいない。「表へ出ろ」となって「きくや」の前の道路で集団での殴り合いのけんかである。新宿警察へひと晩厄介になった奴もいた。わたしも引っ張られそうになったが、なんとかいい逃れた。「こすか」である。「こすか」「えすか」「嬉しか」。肥前では、このみっつの言葉を覚えれば、生きていけるかもしれない。

あちこちで若い演劇集団には似たような小競り合いがあったようである。いわゆる老舗の新劇団の人は、こんなことはやらなかったのではないか。アングラのけんかには新聞も週刊誌も好意的だったような気がする。そんな環境の中で、わたしの劇団「空間演技」は公演を続けたのである。やると赤字であった。赤字になると男は寝泊まりができる宿舎での肉体労働、女はカウンターバーなどでアルバイトをしていた。

そのバーの客を演劇の観客にする女優さんもいた。「なるだけ昼の公演を増やしてくれ」というのである。昼は演劇の観客にして、夜はそのままバーのお客にするのである。居眠りをしている客が多いのもうなずけた。

アルバイトの肉体労働は、主に東京郊外の宿舎で働いたものである。寝泊まりができて3食付きである。多くの演劇人が働いていた。夜になると演劇論が始まる。わたしは次に書くべき作品の内容をよくしゃべった。

（松浦市出身）